



第15回

未来を強くする子育てプロジェクト のご紹介

「未来を強くする子育てプロジェクト」では、
「子育て支援活動の表彰」と「女性研究者への支援」の2つの公募事業を柱として、
すこやかな子育てと夢のある未来づくりを応援しています。



子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。各地域の参考になる特徴的な子育て支援活動を社会に広く紹介し、他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育て不安を払拭することを目的としています。



女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

目次	「未来を強くする子育てプロジェクト」のご紹介	2
	ごあいさつ	3
	講評	4
	子育て支援活動の表彰	6
	女性研究者への支援	15





ごあいさつ

高田 幸徳

住友生命保険相互会社
取締役 代表執行役社長



住友生命では、「一人ひとりのよりよく生きる＝ウェルビーイング」に貢献する「なくてはならない」生命保険会社の実現を目指し、事業活動を通じてSDGs達成に向けた取組みを進め、「健康増進」「子育て支援」「地球環境の保護」のテーマを重点分野として、社会貢献活動に積極的に取り組んでいます。

そのひとつである「子育て支援」事業の大きな柱が、「未来を強くする子育てプロジェクト」です。このプロジェクトは、住友生命の創業100周年記念事業として、2007年より開始し、今回で15回目を迎えました。

今年度は新型コロナウイルスの影響により、さまざまな活動の制限が続く厳しい状況下ではありましたが、子育て支援に取り組まれている皆さまは、各地域

や家庭における課題に対して趣向を凝らして向き合っておられ、より良い子育て環境づくりを目指して懸命な取組みを続けておられます。また、女性研究者の皆さまは、多様で意義深いテーマの研究に、子育てとの両立を行いながら熱意を持って取り組んでおられます。

こうした取組みが、これからの持続可能な未来を創っていく子どもたちに夢と希望を与えてくれ、ロールモデルとなって、社会全体で子どもを見守り育てていく環境づくりに向けた支援の輪が広がっていくことを願っています。

住友生命は、これからも健康で心豊かな社会づくりに向けて、さまざまな活動に取り組んでまいります。

選考結果

第15回「未来を強くする子育てプロジェクト」では、2021年7月から9月までの間、「子育て支援活動の表彰」「女性研究者への支援」の2部門の募集をいたしました。「子育て支援活動の表彰」には211組、「女性研究者への支援」には109名のご応募をいただきました。
選考委員による審査を経て各部門の受賞者が決定しました。

子育て支援活動の表彰 応募数211組

- 文部科学大臣賞／スミセイ未来大賞の1組に授与
- 厚生労働大臣賞／スミセイ未来大賞の1組に授与
- スミセイ未来大賞／2組 ● スミセイ未来賞／10組

表彰数
12組

女性研究者への支援

応募数109名

- スミセイ女性研究者奨励賞／10名

表彰数
10名

講評

「未来を強くする子育てプロジェクト」選考委員



選考委員長

汐見 稔幸

東京大学名誉教授
白梅学園大学名誉学長

社会が大きく変化するなか、さまざまな分野に従来の制度では覆えない隙間ができています。その隙間に生まれている新たなニーズを敏感に感じ取り、それを満たす実践を工夫しておられる方が今年は多数応募してくださいました。選考を通じて、こうした努力と実践がやがて新たな社会づくりにつながっていくのではないかと確信しました。今回応募してくださった皆さんのなかに、日本の次の社会を作っていく人たちの息吹が感じられたことが何よりも喜びです。

近年SDGsに目が向けられていますが、その具体化のためには、経済生産性に特化した20世紀の科学や工業あるいは生活に潜んでいたマインドセットの見直しが課題となっていて、そのための原理的、基礎的な研究が不可欠になっています。今回も、そうした指向性をもって研究を進めようと、使命感を持って取り組む女性がたくさん応募してくださいました。女性はそうした感性と発想が豊かなのではと感じさせるほどでした。新しい学問のトレンドを作る女性研究者の皆さんを応援できることをうれしく思いながら選考をさせていただきました。



選考委員

大日向 雅美

恵泉女学園大学学長

コロナ禍による登園自粛などにより、子育ては母親がカバーするものという論調が再び強まったように思います。そうした状況下、果たして女性研究者からの応募が寄せられるのかと心配していましたが、さまざまな制限を受けつつも、厳しい状況に負けず、コロナ後を見据えた緻密な研究計画を立てている、しなやかで強(したた)かな女性がたくさんいらしたことに大きな喜びを感じました。

一方で、時間が取れない、研究テーマの見直しを迫られるなど、困難な現実に関心が折れかかってしまっている方々も見受けられ、複雑な心境も禁じ得ませんでした。それだけに「しなやかに・強かに」立ち上がろうとしている女性たちの存在が貴重な救いの光になったかと思えます。





選考委員

奥山 千鶴子

認定NPO法人
びーのびーの理事長

今回の子育て支援部門には、行政の支援を待つだけでなく、市民から広く寄付を得て活動する団体からの応募が多く寄せられました。そこからは市民力や、寄付文化が根付いてきたことが垣間見え、大きな感銘を受けました。市民の共感を得るためのホームページ作り、課題をあぶり出して数値化するなどの工夫も見られ、子育て支援の新しい流れを感じとることができました。

一方で、応募の非常に多かった、産前産後のケアや、フリースクールや学齢期の居場所支援などの分野には、まだまだ支援が足りてないとの印象が残りました。そうした地域の課題、子どもや子育て家庭の学習・生活の課題に着目して、今回もこれだけの活動団体が応募してくださったことに感謝いたします。新しい視点が出てきたところに、難しさもありつつ、やりがいも感じられる選考となりました。



選考委員

米田 佐知子

子どもの未来サポートオフィス
代表

コロナ禍で、人とつながり続けることが難しいなか、居場所づくりを行う団体の応募が増えたように思います。居場所型は、固定費もかかるため、続けていくことがとても大変ですが、公的支援が得られない状況下でも、これだけの団体が運営、活動を継続しておられることに、感激しました。「居場所」は、多くの人々が日々集うことで、お互いが勇気づけられるだけでなく、新たなニーズを発見し、そこから新しい取組みが生み出される場所でもあります。今年の実践にも居場所づくりの取組みが多数あり、各地での広がりを心強く感じています。

また都市部は人口が多く支援が集まりがちですが、地方の団体は、不利な環境を跳ね除けて頑張っておられます。今回は離島、地方の団体も選考できてうれしく思いますし、こうした団体の継続にも期待しています。



選考委員

香山 真

住友生命保険相互会社
常務執行役員

コロナ禍が続く中での募集となりましたが、子育て支援活動は211組、女性研究者は109名と多数のご応募をいただきました。新たに設けた「コロナ禍での活動への影響や工夫」の項目からは、応募者の現状と課題克服への姿勢が垣間見られ、社会変化の中で続けてまいりました、本プロジェクトの使命や手ごたえを感じております。私自身は初めて選考に携わり、各応募内容に心を打たれました。全国でさまざまな方が、温かいまなざしでさまざまな子育て支援を行っておられることと、子育てと人文科学分野の研究を頑張っておられる女性研究者の熱意に、心からの感謝と称賛をお伝えしたい思いです。

本プロジェクトが、活動や研究をより良いものにし、世の中に広がることの一助になると幸いです。

受賞団体のご紹介

スミセイ未来大賞・文部科学大臣賞

P8



認定NPO法人 盛岡ユースセンター

スミセイ未来大賞・厚生労働大臣賞

P9



特定非営利活動法人
日本こども支援協会

スミセイ未来賞

P10



特定非営利活動法人 a little

スミセイ未来賞

P10



特定非営利活動法人 大空へ飛べ

スミセイ未来賞

P11



特定非営利活動法人
かごしま子どもと自然研究所

スミセイ未来賞

P11



NPO法人 ここはぐ



スミセイ未来賞

P12



特定非営利活動法人
子どもの環境を守る会 Jワールド

スミセイ未来賞

P12



認定NPO法人 3keys

スミセイ未来賞

P13



認定特定非営利活動法人
多文化共生センター東京

スミセイ未来賞

P13



NPO法人 にこり

スミセイ未来賞

P14



特定非営利活動法人 街のひろば

スミセイ未来賞

P14



一般社団法人
宮古島こどもこそだてワクワク未来会議

スミセイ未来大賞・文部科学大臣賞

認定NPO法人 盛岡ユースセンター

岩手県盛岡市 代表者:又川 俊三

地域のニーズを受け、
子どもたちが笑顔で成長する
フリースクールを運営



● 受賞の言葉 ●

私たちが11年間、子どもたちや保護者の方の声を頼りに続けてきたフリースクールの活動に、このような賞をいただいたことを、大変うれしく感じております。これからも子どもたちに「大丈夫!」と言ってあげられる、安心して学び育てる環境が社会に広がっていくよう、チャレンジを続けてまいります。

子どもたちの気持ちを応援

小学5年生～20歳前後を対象としたフリースクールとして、11年にわたり活動を行っています。子どもたちが笑顔で成長できる場所を目指して、子どもたちの自主性を大切にしながら、彼らがやりたいことを応援しています。学校生活のなかでは、自分らしさを大切にすることが難しいと感じる子どもたちに、「もっと自由なやり方でいいんだ」と感じてもらい、多様な選択肢の中から、自分の進みたい道を選べるようになってもらうことが目標です。

高まるフリースクールの必要性

子どもたちが学校以外で学び・過ごせる環境が、県内にはほとんどない状況である一方、この10年ほどの間に、行政や医療機関におけるフリースクールへの理解が進んだことで、不登校の子どもの紹介が増えています。また家庭単位でも、フリースクールをポジティブに捉える親子も多くなっており、この活動の必要性はますます高まっているといえます。

さらに多くの子どもの受け入れに向けて

今後の目標は、小学1年生からの受け入れです。親を交えた交流会でも、低学年からの受け入れ相談が増えています。新たに小学校の低学年でも受け入れられる体制を整え、次年度からの受け入れを目指し、試行錯誤しています。

活動開始年月 2010年10月

スタッフ数 12名

連絡先 〒020-0022
岩手県盛岡市大通3-1-23 クリエイトビル3F

スミセイ未来大賞・厚生労働大臣賞

特定非営利活動法人 日本こども支援協会

大阪府大阪市 代表者:岩朝 しのぶ

里親制度啓発、里親支援、
アドボカシー(政策提言)を
通して、親と暮らせない
子どもたちの健全育成を支援



● 受賞の言葉 ●

このたびは活動を評価くださり、大変名誉ある賞をいただきありがとうございます。子どもたちを取り巻く課題は多岐に渡りますが一人ひとりに寄り添う大人の存在が子どもの人生を変えます。子どもの人生が変わると社会や未来が変わります。一人でも多く、一日でも早く課題を解決し、団体が必要とされない社会を目指してまいります。

全国45,000人の子どもたちのために

さまざまな事情で親と暮らせない、養育が必要な子どもは全国に45,000人といわれています。彼らの受け皿となる里親は大変少なく、また里親となった場合も、4人に1人は、うまく対応できずに離脱する状況にあります。より多くの子どもを助けるためには、里親制度自体を認知してもらうための啓発活動、里親への積極的支援、そして里親制度をさらに有効に機能させるためのアドボカシーが欠かせないと考え、これらを中心とした活動を行っています。

☐ コロナ禍でも動きを止めない

新型コロナウイルス拡大前、全国の里親交流会は定期的に交流を行い、里親同士で支え合っていました。しかし、コロナ禍で中止を余儀なくされ、里親の孤立が危ぶまれる状況下、当団体ではいち早く「オンライン里親会」を実施し、里親支援を続けています。また、これまで45,000枚のチラシを配布して行ってきた「全国一斉里親制度啓発キャンペーン」も、ツイッターを活用した「45,000リツイートキャンペーン」として展開しました。

里親制度のさらなる普及に向けて

今後は、各地で困難な運営を強いられる里親会を支える仕組みを立ち上げたいと考えています。また、企業を通じた啓発にも力を入れたいと思っています。こうした活動を通し、さらに認知を広めると同時に、里親として手を上げやすい社会を作っていくことが目標です。

活動開始年月 2010年5月

スタッフ数 2名

連絡先 〒542-0064
大阪府大阪市中央区上汐2-6-13-205
TEL 06-6767-1130

スミセイ未来賞

特定非営利活動法人 a little

兵庫県西宮市 代表者:大和 陽子

「半径1.5キロ」を合言葉に
身近な距離で支え合う地域を目指す

女性が生涯を通して自分らしくいられる社会を目指し、コミュニティ作り、家事サポートの提供をしています。スタッフであるサポーターの自宅から半径1.5キロ圏内の支え合いを掲げ、産前産後の家庭や、ひとり親家庭を支援します。顔の見える関係を作ることで、子育てのバトンが地域で生まれています。この活動が、地域全体の子育て環境の改善につながれば、と考えています。



活動開始年月 2015年7月

スタッフ数 15名

連絡先 〒662-0964
兵庫県西宮市弓場町6-35-206
TEL 090-5557-9783

● 受賞の言葉 ●

このたびはこのような賞をいただきありがとうございます。子育ての環境は時代と共に変化し、常に課題があります。コロナ禍での子育てはさらに不安と孤独が増していると思いますが、安心して話せる場所が一つあることで乗り越えられることも多くあるはずだと思います。その身近な居場所になれるようこれからも力を注いでまいります。

特定非営利活動法人 大空へ飛べ

富山県小矢部市 代表者:谷口 徹

文化・福祉活動を通した子どもたちの
居場所づくり、無料学習支援や
不登校児への支援、保護者への
教育相談活動

子どもたちの健やかな成長のためには、教員、保護者、地域の方々が協力し合う活動が必要と考え、35年間にわたり、多くの子どもたちも参加する歌や劇のステージを毎年開催してきました。病院、学校、各種施設でのコンサートや震災支援募金活動など、ボランティア活動も積極的に行ってきました。3年前からは、不登校の子どもたちの居場所づくりや、無料学習支援も開始しました。来年度からは、「子ども食堂」も計画しています。



活動開始年月 1986年12月

スタッフ数 29名

連絡先 〒932-0832
富山県小矢部市野端50-1
TEL 0766-68-1755

● 受賞の言葉 ●

多くの子どもたちが自分の居場所や表現する場を「大空へ飛べ」の活動の中で見つけ、大きく成長してきました。教員と保護者、親子、子ども同士、メンバー同士が、年齢、性差、立場、障がいのあるなしを問わず、きずなを強めてきました。受賞の喜びをみんなで分かち合い、これからも意義ある充実した活動を続けたいと思います。



特定非営利活動法人 かごしま子どもと自然研究所

鹿児島県鹿児島市 代表者: 岩田 治郎

子どもから大人、地域や身近な自然を
再生することを目指す
自然体験・環境教育を展開

子育てを含む今日の社会的課題や環境問題を解決するためには、大人の行動変容が必要だと考えています。子どもは自然や生きものとふれあい、自主的な活動が尊重されることにより、問題意識だけでなく、やり抜く力、協調性といった、非認知能力や課題解決力が育まれます。こうした子どもの変化が、大人の価値観に影響を及ぼすことがあります。子どもから大人へ、そして周囲に波及し、よりよい地域や身近な自然、明るい未来が醸成されるよう願っています。



活動開始年月 2007年10月

スタッフ数 4名

連絡先 〒892-0871
鹿児島県鹿児島市吉野町2147-9
TEL 099-801-3704

● 受賞の言葉 ●

環境問題を始め、子どもたちを取り巻く環境も近い未来も、課題山積みで問題の根も深く、到底個人や一団体では解決することはできません。いただいた賞をエネルギーに、改めてこれから目指すべき方向性・ゴールを、関わる方たち皆と共有し、目の前の課題を一つひとつ確実にクリアし、さらに前進してまいります。

NPO法人 ここはぐ

秋田県秋田市 代表者: 小田嶋 麻貴子

出産にかかわる
さまざまな悩みを抱える女性、
そして家族を支える場を提供

「一人ひとりに寄り添う」を信条に、子どもを亡くした親の心を支えるグリーフケア活動をはじめとして、産前産後をサポートする「産前産後カフェ」「助産院」の運営、望まない妊娠の相談ダイヤル「にんしんSOS」など、妊娠前後、出産、子育てにかかわる多様な活動を展開していることが団体の特徴です。「ここはぐ」の役目は、場を作ること。助産師をはじめとする多くの専門家が連携して活躍できる場所を作り、母親たちを支える活動にしたいと考えています。



活動開始年月 2011年4月

スタッフ数 10名

連絡先 〒010-1403
秋田県秋田市上北手荒巻字堺切24-2
TEL 070-1148-5589

● 受賞の言葉 ●

このような素晴らしい賞をありがとうございます。これまで支えてくださった方々や関わってくれたスタッフに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、子どもがいる・いないにかかわらず、地域の女性が自分らしく生きていけるよう、また、子どもたちをみんなで見守りあいながら楽しく安心して育てていくことができるよう、居場所づくりをしていきます。

スミセイ未来賞

特定非営利活動法人 子どもの環境を守る会 Jワールド

千葉県松戸市 代表者:三浦 輝江

子どもたちが安心して
成長できる環境を守り、
保護者の悩みに寄り添う

思 春期の子どもや保護者への支援、またシングルマザーのための子育てサポートの必要性は増えています。さまざまな理由から、学校や家庭に居場所のない中学生・高校生向けに、大家族体験ができる「ユースペース」を運営。また、より小さな子どもとその保護者へは、子育てを支援する「リバちい」事業など、多様な活動を通じて、誰もが自立し、豊かな人生を歩めるよう、応援していきたいと思っています。



活動開始年月 1995年7月

スタッフ数 30名

連絡先 〒270-0034
千葉県松戸市新松戸4-256-1
SRCビル2F

● 受賞の言葉 ●

このたびの表彰を大変感謝します。一人ひとりが高価で尊い、という理念のもと、居場所づくり事業を軸として子どもたちと関わり、自立した社会人となれるように支援を行ってまいりました。今後も全力で取り組んでいきます。今回の受賞が、多くの子どもたちが支援を必要としていることを発信する機会になればと願います。

認定NPO法人 3keys

東京都新宿区 代表者:森山 誉恵

すべての子どもが十分な教育、
愛情を受けられる社会を目指し、
子どもに寄り添った活動を展開

生 生まれ育った環境によらず、すべての子どもに必要な支援を届けることを目的に、東京、神奈川の児童養護施設延べ29カ所で学習支援を実施するほか、親に頼ることが難しい子どもの悩みに応える、10代のための相談窓口まとめサイトを運営。さらにこれら活動の集大成として、家や学校に居場所がない子どもたちの居場所「ユースセンター」を開設するなど、子どもたちの心に寄り添った支援を行っています。



活動開始年月 2009年4月

スタッフ数 24名

連絡先 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-12-5
Uni-Works新宿御苑1F
TEL 03-5906-5416

● 受賞の言葉 ●

このたびは栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。今回の副賞は、虐待などで十分な学習環境に恵まれなかった子どもたち向けの教材開発に活用いたします。家族以外に頼れる場所を増やしていくことで、子どもたちが安心・安全に育つ社会を目指して今後も尽力します。末永く応援のほど、よろしくお願いたします。



認定特定非営利活動法人 多文化共生センター東京

東京都荒川区 代表者：栞木 典子

「たぶんかフリースクール」や
高校進学ガイダンス等を通じて、
外国にルーツを持つ子どもたちの
学びを支援

外国にルーツを持つ子どもたち、特に義務教育を終えて来日する子どもたちが日本の高校に進学するための受け皿は少なく、また、教育に関する情報を得ることも難しいです。当団体では、主に外国にルーツを持つ学齢超過の子どもたちのための「たぶんかフリースクール」を運営しています。日本語や教科を学ぶ場を提供して高校進学を支援し、多様な子どもたちが活躍できる社会の実現を目指しています。



活動開始年月 2001年4月
スタッフ数 33名
連絡先 〒116-0002
東京都荒川区荒川3-74-6
メゾン荒川Ⅱ201号室 TEL 03-6807-7937

● 受賞の言葉 ●

外国にルーツを持つ子どもたちの教育の機会を保障するために取り組んできた活動を評価し、認めていただきありがとうございます。国籍を問わず、すべての子どもたちが、自分の可能性を十分に発揮できる地域社会を創るため、子どもたちと共に、活動を続けていきます。学び合い、わかり合う輪を広げていきたいと思っています。

NPO法人 にこり

福岡県遠賀郡岡垣町 代表者：松丸 実奈

医療的ケアが必要な子どもたちと
家族の“当たり前の願い”を叶える、
医療・介護支援

病気が障がいにより、日常的に医療的なケアを必要とする子どもたちとその家族の、「いろいろな所へ出かけたかった」「お友だちと一緒に、学校や保育園に行きたい」といった“当たり前の願い”を叶えるために活動を始めました。多様なニーズに対応するため、今では、訪問看護、訪問介護（こども専門ヘルパー）や福祉有償運送、保育所等訪問支援、児童発達支援など、多くの事業を展開するようになっています。



活動開始年月 2018年9月
スタッフ数 43名
連絡先 〒811-4233
福岡県遠賀郡岡垣町野間3-4-24
TEL 093-282-5810

● 受賞の言葉 ●

「スミセイ未来賞」に選んでいただけたことに感謝の気持ちでいっぱいです。私たちは、日々の生活に医療が必要だったとしても、経済的に困窮した家庭に生まれたとしても、すべての子どもたちに可能性が広がる社会を目指しています。このたびの受賞を力に変えて、子どもたちの笑顔のため、小さな一歩を歩み続けたいと思っています。

スミセイ未来賞

特定非営利活動法人 街のひろば

埼玉県入間郡三芳町 代表者:松浦 康介

外国にルーツを持つ家庭や、
ひとり親、生活困窮家庭の
子どもたちに寄り添った学習支援

訪日したばかりの子どもたちに寄り添った、丁寧な日本語支援を中心に、地域の生活困窮家庭の小学生、中学生に向けた学習指導など、学校だけではカバーしきれない課題を抱える子どもたちをサポート。成績を向上させるのではなく、学習の場を子どもたちの安心できる居場所にしていくこと、そして学習内容を理解できたという経験を、子どもたちの自信につなげていくことを目的として活動しています。



活動開始年月 1997年9月

スタッフ数 27名

連絡先 〒354-0043
埼玉県入間郡三芳町竹間沢421-19
TEL 090-1797-6927

● 受賞の言葉 ●

このたびは私たちの団体を選んでいただき、誠にありがとうございました。長年の夢であった日本語教材の出版に向けて、大きな後ろ盾となります。小さな町の、小さな集いからスタートした私たちの活動ですが、出版という手段によって日本語を必要とする世界中の学習者の手に届けられるよう、今後も身を引き締めて精一杯頑張ります。

一般社団法人 宮古島こどもこそだてワクワク未来会議

沖縄県宮古島市 代表者:寺町 北斗

宮古島の家庭と子どもを市民、
専門職、企業が協働で支える活動

宮古島は、生活困窮、DV、虐待等の多くの課題を抱えています。こうした家庭に対して、相談窓口、学用品配布、DVシェルター、ひとり親世帯等への食支援等、多様な支援活動を展開してきました。食材や学用品の確保には、企業、団体、PTA、市民など多くの方から協力をいただきながら、食材配達時の相談対応やDVシェルター利用者のケア等では医療・福祉の専門職も参画して、家庭と子どもを地域で支える仕組みを創るため、活動しています。



活動開始年月 2019年8月

スタッフ数 6名

連絡先 〒906-0006
沖縄県見宮古島市平良字西仲宗根486-9
メゾンとんぼ101 TEL 0980-73-1261

● 受賞の言葉 ●

私たちの活動は、開始3年目。これまで多くが新型コロナとの戦いでした。休校、失業、生活困窮、また、DVや虐待も増加しました。今後も苦しい状況が続くなか、今回の表彰は大きな励みとなります。子育ての未来を強くするため、引き続き取り組んでいきます。このたびはありがとうございました。

スミセイ女性研究者奨励賞



岡田 有美子

明治大学大学院 理工学研究科

● 受賞の言葉 ●

社会人大学院生となった直後第一子を妊娠。産後はパートナーの住む地方に暮らし、大学や研究対象地域へと飛行機で移動するという生活を続けてきました。コロナの影響で移動が難しくなりこれ以上の研究の継続は不可能かもしれないと悩み続けていましたが、このたびの受賞でどうにか続けられそうです。心より感謝申し上げます。

研究テーマ

移動とセクシュアリティ

— 沖縄をめぐる現代美術への視座 —

[内容]

国家の狭間で翻弄される沖縄では、生存が脅かされる状況が身近にある。中でもさらに社会的に弱い立場に置かれるひとの生きづらさは深刻で、芸術は時にそのようなひとを見つめ、表現と向き合ってきた。しかし、「内」と「外」の視線が交差する中、芸術制作と受容の局面もまた衝突が絶えない。本研究で沖縄をめぐる芸術制作と受容の両面において、何が分断を再生産してきたのかを明らかにし、新たな分断を避ける方法を見出したい。



加藤 晴美

筑波大学 人文・文化学群 非常勤講師

● 受賞の言葉 ●

複数の大学等で非常勤講師をしながら博士号を取得し、研究を続けてきました。研究と育児の両立は予想以上に難しく、いかにして調査に出かけるか、研究のための時間を捻出するか、悩みの連続です。家族や恩師に支えられて、これまで研究を継続することができましたが、今回の受賞を励みに、より一層研究に邁進したいと思います。

研究テーマ

1920-30年代における 遊廓の空間的特質とその変容

— 娼妓と遊客の生活史を中心として —

[内容]

近代日本において公認された性売買の空間である「遊廓」は、1920-30年代における廃娼運動の活発化や私娼街の発達等を受けて変容したと想定される。本研究では、当該時期における遊廓の景観や空間構造を明らかにし、さらに貸座敷の一次史料から娼妓や遊客らの実像を問い直す。それにより、遊廓で生きた人びとの経営・労働・遊興といった「生活」の総体がいかに変化したのかを解明し、現在も続く性売買の問題を解決する糸口にしたい。

スミセイ女性研究者奨励賞



金城 美幸

立命館大学 生存学研究所 プロジェクト研究員

● 受賞の言葉 ●

子育てをしながら調査を続けるのは大変ですが、研究と子育ての両方をサポートする意義深い賞に選考していただき、感謝しております。パレスチナでも研究しながら子育てをする中で、難民の人々の力強い姿にたくさん学び、助けていただきました。こうした研究や経験を社会に還元できるように一層励んでいきたいと思えます。

研究テーマ

パレスチナ難民たちのネットワーク化と故郷についての記憶形成過程の研究

[内 容]

約75年前に故郷を追われたパレスチナ難民たちは、子孫も含めた約570万人が今も故郷に戻れていない。離散が続く中、難民は同じ村や都市出身者からなる村民協会を設立してネットワーク化をはかり、故郷の記憶を掘り起こしてきた。難民の記憶には、難民問題に新しい形での解決を導く可能性があり、故郷でのユダヤ教徒やキリスト教徒との共存の記憶は、現在広がる宗教的不寛容を考え直す上でも重要な意義があることを明らかにしたい。



清水 紀子

北海道大学大学院 法学研究科

● 受賞の言葉 ●

研究の継続が困難な子育て研究者への支援という本プロジェクトの趣旨に敬意を表し、このたびのご支援に心より感謝申し上げます。夫の転勤にあたって一人で暮らすことを優先し、大好きだった職をあきらめて、新たな道を模索するという私の生き方を肯定していただきました。これを励みに一層精進いたします。

研究テーマ

特許権存続期間延長登録制度の現状把握に向けた実証研究

[内 容]

新薬創出を後押しする日本は、薬事承認のため失われた特許期間を補填する「特許権存続期間延長登録制度」が存在する。しかし、創設30年の社会的技術的变化を受け、その運用は複雑化している。一方、EUの特許延長制度(SPC)でも昨今見直しの機運が高まり、実態を把握する大規模な実証研究がなされた。ここでの手法を参考にし、日本の先行実証研究を補完する実証研究を行い、エビデンスに基づく政策立案の基礎を構築したい。



瀬川 千裕

神戸大学大学院 人間発達環境学研究所

● 受賞の言葉 ●

このたびは栄えある賞をいただき、心より感謝し、御礼を申し上げます。私も夫も研究者を志しており、その中での子育ては経済的に大変厳しいものでした。研究費を捻出することもままならない状況が続いており、研究を断念せざるを得ないと考えておりました。今回の受賞を機に、研究を継続し、日々精進する所存です。

研究テーマ

作文教育の理論と実践に関する研究 — パフォーマンス評価への示唆を求めて —

[内 容]

近年の教育課程改革や授業づくりにおいて求められている「主体的・対話的で深い学び」では、子どもの作文のみならず、作文を書く過程も重要である。そこで、子どもの書く過程の意義を探究してきた作文教育を取り上げる。具体的には、戦前に作文教育を中心とした実践をおこない、戦後は作文教育の理論化に積極的に取り組んだ今井誉次郎に焦点を当て、作文教育の理論的探究とともに、現代的・実践的な提案をする。



高田 陽奈子

同志社大学法学部 日本学術振興会 特別研究員PD

● 受賞の言葉 ●

研究を通じて世界平和や人権保障に貢献したいという夢を抱いて研究者を目指しましたが、子育てと研究の両立に不安を感じることもありました。そんななか、子育て中の女性研究者を温かく支えてくださる御プロジェクトに出会い、大きな励ましをいただきました。本当にありがとうございました。今後も一層精進してまいります。

研究テーマ

人権条約の実効的な 国内的实施メカニズムの構築に向けて — 障害者権利条約33条2項を手がかりに —

[内 容]

人権条約の実効的な実施には、そのための国内的な実施メカニズムの構築が不可欠である。先行研究は主に国内裁判所を検討対象としてきたところ、本研究では、その他の実施メカニズムにも広く目を向け、障害者権利条約33条2項上の条約の実施および監視に関する規定を手がかりとして、国際的な制度と国内的な制度との間の、そして国家当局と市民社会との間の「懸け橋」としての、固有の国内的实施メカニズムのあり方を探究する。

スミセイ女性研究者奨励賞



鶴田 星子

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科

● 受賞の言葉 ●

博士課程在籍中に出産し、所属機関から離れて研究を続けてきましたが、思うように論文の執筆が進まず、研究をいつまで続けるのか、悩むこともありました。そのような折に奨励賞に選んでいただき、大変励みになりました。これを機に、今後もより一層研究に邁進していきたいと思えます。本当にありがとうございました。

研究テーマ

信仰の選択と家族・親族とのつながり
— 現代インドにおける異宗教間夫婦の生活実践 —

[内 容]

インドにおいてカースト・宗教の異なる相手との結婚は、家族・親族との絶縁を招き、時には政治的迫害の対象ともされうる。しかし、異宗教間結婚をした夫婦は、決して「伝統的な」価値観を放棄した近代論者ではなく、さまざまな差異のはざままで両者の折り合いをつけながら生活を営んでいる。本研究では、そのような彼らの生活実践に着目し、彼らがいかに家族・親族関係を(再)構築しようとしているのかを検討していく。



波塚 奈穂

東京大学大学院 総合文化研究科

● 受賞の言葉 ●

次男が小児がんを患い、長期の闘病と入院付き添い生活により心身ともに限界で研究を諦めかけていましたが、今回賞をいただいたことによりフィールドワークの再開が可能になり、地域研究の道が再び拓かれたことに、心より感謝いたします。難病・障がい児の母でも研究が続けられるという実例になれるよう全力で取り組んでまいります。

研究テーマ

先住民地区開発に対峙する女性リーダー
— 中米先住民の大規模プロジェクト
反対運動を例として —

[内 容]

パナマとホンジュラスの先住民居住区における水力発電所建設を中心とした大規模開発が先住民に与える影響と、その反対運動によって先住民活動家、特に女性リーダーにもたらされる脅威を明らかにし、先住民が自らの尊厳を維持するために取る戦略とその結果について分析を試みる。自身が子どものいる女性であることを生かした、先住民女性との長期的な関係に根差した成果は、男性研究者にとっても貴重なリソースとなり得る。



橋本 泰奈

東京大学大学院 総合文化研究科

● 受賞の言葉 ●

このたびは、栄えある賞を授与いただき、心より感謝申し上げます。第一子出産後、復学した矢先にコロナ禍の影響を受け、研究と仕事を中断せざるを得ない状況に追い込まれました。育児と研究との両立を何度も諦めかけましたが、今回の受賞を励みに、今後も家族と過ごす日々を大切に、研究を着実に進めていきたいと思っています。

研究テーマ

戦後西ドイツの外国人労働者政策と ナチズムの「過去」

[内 容]

ナチ・ドイツは、第二次世界大戦下において大規模な外国人強制労働動員を展開した。その経験からわずか10年にして再開された西ドイツの外国人労働者政策は、しばしばナチ時代との連続性から批判的に評価されてきた。本研究では、これに関して政策の担い手となった労働行政官に注目し、ナチ時代と戦後との連続性と非連続性を再評価するとともに、過去の経験が後世社会をいかに規定し得るかという問いに、歴史的な視点から取り組む。



李 潤澤

大阪大学大学院 言語文化研究科

● 受賞の言葉 ●

コロナ禍で国境の壁が高くなった現在では、異文化理解の重要性をさらに実感しました。日中の相互理解、友好のために未知の研究領域で模索しつつ進んでいく私には、このたびの受賞は研究のさらなる邁進する力の源にもなります。支援の方々へ深く感謝します。今後とも我が子の成長を守りながら、研究者の道に尽力する所存です。

研究テーマ

日本映画にみる満洲記憶の表象についての 映画社会学的研究

[内 容]

日本と中国東北地方との歴史的文化関係について関心を持ち、戦時中の満洲国の映画スターの考察から、戦後日本映画における満洲の表象の研究へと路線を展開してきた。本研究では、文化装置としての映画はいかに戦後日本社会の満洲についての歴史記憶を表象・記録、受容してきたかという具体的な考察を通して、各年代の満洲記憶を語る際の複雑な文化的力学の実態と変遷を把握し、戦後の日中文化関係のさらなる解明に一石を投じたい。